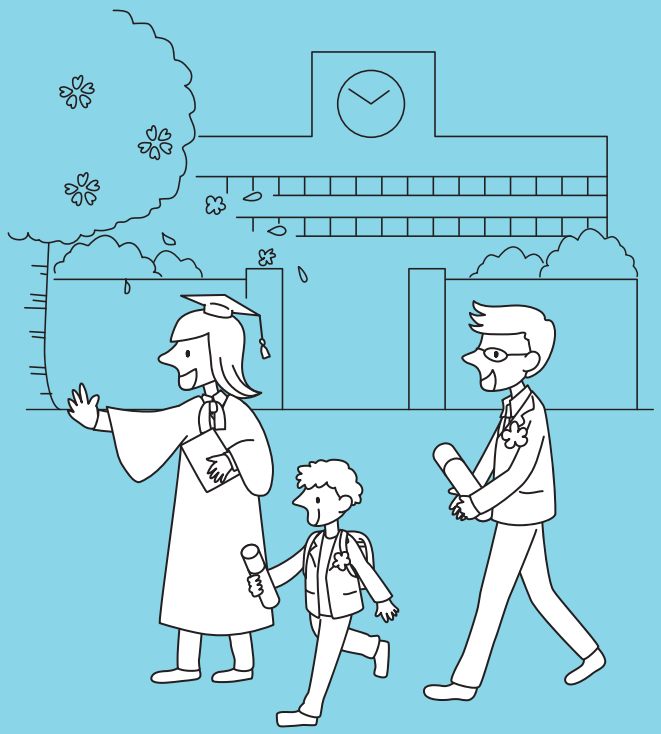
ひろげよう こころのネットワーク

ひょうご人権ジャーナル

きずな

2012年
（平成24年）
3



特集テーマ

多文化共生
はぐくもう多文化共生のまち

3月21日 国際人種差別撤廃デー

1960（昭和35）年のこの日、南アフリカで人種隔離政策（アパルトヘイト）に反対するデモ行進に向けて警官隊が発砲。この事件をきっかけに国連が人種差別撤廃に取り組むことになり、1966（昭和41）年の国連総会で制定されました。

2 外国にルーツを持つ子どもたちの学習を支援
多文化子ども共育センター MOI（神戸市長田区）

3 多文化共生のまちづくりに向けて
野津隆志さん（兵庫県立大学経済学部教授）

4 日本語の学習支援にボランティアが大活躍
豊岡市国際交流協会「とよおか日本語教室」（豊岡市）

5 海外移住の歴史を伝える多文化共生の活動拠点
神戸市立海外移住と文化の交流センター（神戸市中央区）

6 まちのKIZUNAリポート
すべての人に正確な情報を
多言語センターFACIL（神戸市長田区）

7 ふれあいサロン

8 情報ぷらざ

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会

特集

多文化共生

兵庫県における外国人県民の数は約10万人ですが、異なる言語や生活習慣、文化等への理解不足などから、偏見や差別を受けるなど、さまざまな人権問題が起きています。すべての県民が互いの違いを認め合い、交流を深め、共に生きていくまちづくりに向けてどうすればよいかを考えてみましょう。

近ごろの話題

多文化子ども共育センター MOI（モイ）（神戸市長田区）

外国にルーツを持つ子どもたちの学習を支援

NPO法人神戸定住外国人支援センター（KFC）が運営する「多文化子ども共育センターMOI」は日本の学校教育になじみにくい外国にルーツを持つ子どもを対象に、進路保障を重視した学習支援に取り組んでいます。

MOIは、KFCが週2、3回開いていた学習教室を常設するかたちで、2009（平成21）年に開所。ベトナム、中国、フィリピン、ウクライナなど7カ国42人の子どもたちが放課後に集まってきます。日本語学習や学校の教科学習をサポートするとともに、日本語があまり話せない保護者とのコミュニケーションのために母語の教室も開いています。

「外国にルーツを持つ子どもたちが社会で自分の能力を生かし、暮らしていくには日本語を理解し、学力を身に付けることが必要です」と指導スタッフの一人、志岐良子さん。

MOIとはベトナム語で「新しい」の意味です。子どもたち一人ひとりが輝ける、新しい社会を築いていきたいという願いが込められています。

▲ベトナム語教室の様子。日本で生まれ育ち、母語を話せない子もいます

▲指導スタッフの多くは大学生や留学生のボランティア。子どもたちにとって身近なお兄さん、お姉さん的存在です

▲経済的な理由で高校進学を断念する子どもが多いことから、「定住外国人子ども奨学金」を設けて協力を呼び掛けています。詳しくはhttp://www.social-b.net/kfc/scholarship/を参照

メッセージ

多文化共生のまちづくりに向けて

兵庫県立大学経済学部教授 野津（のつ） 隆志（たかし） さん

なぜ「多文化共生」なのか

外国人の数が増加し、その国籍も多様化する中、多文化共生が地域づくりの課題となっています。多文化共生とは「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」（総務省「多文化共生の推進に関する研究会報告書」2006年）とされています。従って、多文化共生の実現のためには、日本人住民も外国人住民も共に地域社会を支える対等の主体であるという認識がまず重要です。

多文化共生は、今やアジア共通の課題でもあります。台湾では中国大陸や東南アジアから就労や国際結婚のために、この10年で約100万人が入国しました。韓国では1988年のソウルオリンピック以降、外国人労働者が増加し、2007年には外国人登録者数が100万人を超えています。現在、韓国の農漁村地域では、41％の男性が外国人女性と結婚しているとも言われています。アジアで同時に生じている「地域のグローバル化」と呼ばれる現象です。日本でも隣国でも、外国人住民といかに共存するかは21世紀の大きな課題となっています。

地域のグローバル化に向けての課題

兵庫県でも「地域のグローバル化」が進行し、都市、農村を問わず外国人を迎える時代となっています。2001年に県内の外国人登録者数は10万人を超え、以降10万人前後で推移しています。現在、県内のある自治体では、市内の小学校十数校のうち半数以上に、親が国際結婚をした子どもたちが通学しています。

外国人住民や児童生徒は、日本語によるコミュニケーションの困難、文化や習慣等のちがいによる生活上の困難、さらに地域に関する情報や知識が不足し、地域や学校の中で孤立する場合も少なくないのが現状です。

多文化共生とは、外国人住民もまた地域で共に暮らす生活者として認め、外国人住民への支援をトータルに行う仕組みづくりの理念です。住宅、就労、教育、言語コミュニケーション、福祉、医療などさまざまな生活分野をいかに統合し支援するかが焦点となります。また、これまで地域社会の現場で支援の担い手であった外国人の自治組織、国際交流協会、NPO・NGO、その他の民間団体といかに行政が連携するかも課題でしょう。

多文化共生は地域社会の「課題解決」という側面だけではなく、地域住民の異文化への理解力や、異文化とのコミュニケーション力を育てる未来志向の理念でもあります。世界に開かれた地域づくりの理念として多文化共生を考えていきましょう。

プロフィール

1956（昭和31）年島根県生まれ。筑波大学人間学類、同大学院教育学研究科単位取得。タイ・スリナカリンウィロート大学日本語教員、埼玉短期大学教員を経て、1997（平成9）年県立神戸商科大学（現兵庫県立大学）教授に。兵庫県在住の外国人児童生徒の学習支援に関する研究をしている。著書に『国民の形成』（明石書店）、『アメリカの教育支援ネットワーク』（東信堂）など。

会への取り組み

日本語の学習支援に
ボランティアが大活躍

豊岡市国際交流協会「とよおか日本語教室」（豊岡市）

但馬地域には約1,000人の外国人が暮らしています。「豊岡市国際交流協会」が日本語教室を始めたのは1996（平成8）年。現在、市内8カ所で開講し11カ国85人が学んでいます。学習者の多くは中国やフィリピン、ベトナムなどアジア諸国出身者とALT（外国語指導助手）です。

指導に当たっているのは、（公財）兵庫県国際交流協会の「日本語教育ボランティア養成講座」等で学んだボランティアの人たちで、日本語の指導を通して学習者と交流を育んでいます。ボランティアたちは研修会にも参加し、指導法や日本語を母語としない人たちの実情などを学んでいます。ボランティアの一人は「学習者の皆さんはとても一生懸命なので、その思いに応えられるよう活動しています。地域の外国の方たちに少しでもお役に立てればうれしいです」と話します。

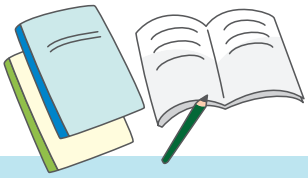
最近、市内では学習者が日本に呼び寄せた子どもや、来日後に生まれた子どもが増えています。彼らは学齢期を迎えると言語や学習の支援が必要になり、ボランティアの役割も大きくなります。このような状況を的確に把握し、市や教育委員会、学校、地域、ボランティアなどは連携を密にしながら、より充実した支援を図っています。

▲学習者一人ひとりのレベルに合わせて丁寧に指導しています

ひらがなの練習の時間も十分に取っており、回を追うごとに上達しています ▶

▲ボランティアたちは研修会でスキルアップを目指します

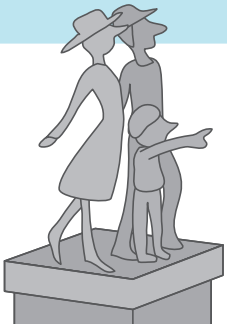
豊岡市国際交流協会
豊岡市立野町20-34 豊岡市民会館2階
TEL/FAX 0796(24)5931
✉tia@tia-online.net



取材ノートから

その地域ならではの

多文化共生社



海外移住の歴史を伝える 多文化共生の活動拠点

神戸市立海外移住と文化の交流センター（神戸市中央区）

▲1928（昭和3）年に国立移民収容所として完成した建物。名称は時代とともに神戸移住教養所、外務省神戸移住斡旋所、神戸移住センターへと変わっていきました

▲ CBK のポルトガル語教室。松原さんの後に続いて、子どもたちが元気に発声します

▲毎年６月にはブラジルの収穫祭「フェスタ・ジュニナ」を開催。日系ブラジル人だけでなく、地域の人たちも集まってブラジルの音楽や料理を楽しみます

「神戸市立海外移住と文化の交流センター」の建物は、昭和初期の鉄筋コンクリート造り５階建て。もともとブラジルなど海外へ移住する人々が神戸港を発つ前に研修を受けた「神戸移住センター」でした。１９７１（昭和46）年にその役目を終え、２００９（平成21）年にブラジル移住100年を記念して、移住ミュージアムや在住外国人支援、国際芸術交流の機能を備える同センターに生まれ変わりました。

同センターには、日本とブラジルの交流を育む㈶日伯協会をはじめ、多文化共生を掲げるさまざまな団体が入居しています。その一つ、ＮＰＯ法人関西ブラジル人コミュニティ（ＣＢＫ）はポルトガル語と日本語による生活相談、日系ブラジル人の子どもを対象としたポルトガル語教室や日本語教室、学習支援などに取り組んでいます。代表の松原マリナさんは「在住日系ブラジル人は地域での人間関係や子どもの教育など多くの悩みを抱えています。関西一円はもちろん、これから日本に移住しようとする人から電話がかかってくることもあります」と話します。

１階と２階に開設している移住ミュージアムでは、海外移住の歴史や当時の神戸の街並み、移住先への道のりや暮らしを映像、写真で紹介しています。学習施設としての知名度も高まっており、学校や家族連れの来館が増えているそうです。皆さんも訪ねてみませんか。

神戸市立海外移住と文化の交流センター
神戸市中央区山本通3-19-8
TEL 078(272)2362　FAX 078(272)2210
●開館時間　10:00～17:00（入館は16:30まで）
●入館料　無料
●休館日　月曜（祝休日の場合は翌平日）、年末年始

◀フィリピン人女性グループの番組制作の様子。自らの言葉で生活情報などを発信しています

まちのKIZUNAリポート

すべての人に正確な情報を

ー震災復興に果たすコミュニティFM局の役割ー

多言語センターFACIL（ファシル）（神戸市長田区）

被災地における情報発信の大切さ

東日本大震災ではラジオ放送の役割と有効性が見直されました。被災地では約20の臨時災害FM局が開局し、生活に必要なさまざまな支援情報を提供しています。その中には、被災地にいる外国人のために多言語で放送する局があります。

被災地には研修生、留学生、日本人の配偶者、日系人などさまざまな背景をもつ外国人が生活しています。こうした人たちの中には日本語が十分理解できず、必要な情報を得ることが困難なケースもありました。そこで活躍したのが多言語によるラジオ放送です。「多言語センターFACIL」では、阪神・淡路大震災をきっかけに誕生した「FMわぃわぃ」と協力し、現地の情報発信活動をサポートしています。

FACILの理事長、吉富志津代さんたちは、震災直後から震災情報などを多言語で放送し、他のラジオ局にも利用してもらえるようにしました。4月には宮城県内の臨時災害FM局を訪れ、震災情報等をポルトガル語や中国語などにした音声データを提供するなどしました。

被災地では現在、復旧・復興に向けた取り組みが進んでいますが、吉富さんたちはラジオ放送が果たした役割を発展させ、多文化共生の視点を入れた復興のまちづくりに変化していく必要があるといいます。

新たなつながりを生かしたまちづくり

FACILが目指しているのは「マイノリティとしての気持ちや文化を大切にした地域づくり」です。①多言語による情報発信、②コミュニティラジオの活用推進、③当事者のエンパワメント（一人ひとりが誰でも潜在的に持っている能力やパワーや個性を発揮できるようになること）の育成の三つを活動の柱にしています。現在、これまでの取り組みを発展させ、結婚を機にフィリピンから東北に来た女性たちを中心としたグループの活動を支援しています。

このグループは、津波で傷ついた街に花を植える活動を通じてみんなを元気にしたり、母国の言葉であるフィリピノ語（タガログ語）による番組作りや放送を通じて、同じフィリピン出身の人たちの心を癒やすなど多彩な活動を計画しています。「地域の多様な出自の住民が自分らしく暮らし、地域社会の中で自分ができることを生かせる、それが本当の共生社会への一歩になります」と吉富さん。

被災地では、多言語ラジオ放送を今後も継続するところが出てきているそうです。「多文化共生」という言葉が、頭の中の理解だけで終わることなく、新しいまちづくりの核として捉えられ、あらゆる機会を生かして着実に実践されていくことを願ってやみません。

きずなフィーブフリー ～おすすめの一冊～

アッティラ！

籾山（もみやま）市太郎著（光文社）

「アッティラ」とは5世紀ごろ、中央アジアを中心に大帝国を築いたフン族の王の名前。その子孫と称する者たちがアッティラのお告げとして、キャンピングカーで突如、日本のある町に現れるところから物語は始まります。彼らは夜な夜な演奏会を開き、そこに集まってきた住民同士がさまざまなドラマを繰り広げます。また、演奏会のシーンで書かれている歌詞が印象的です。平易な言葉でつづられているのですが、どことなく心が癒やされる感じになります。

本書には表題のほか、認知症の女性と彼女に寄り添う男性との交流を描いた「ほもよろを」、製薬会社に勤めるOLとその夫とのやり取りが面白い「マルチャペル」の二つの短編を載せています。

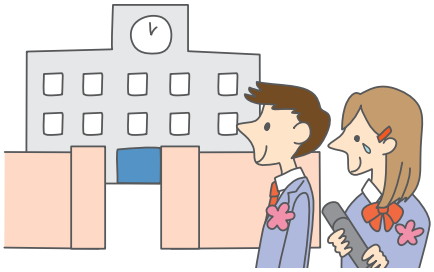
読者からのお便り

●1月号の「被災地は、今」を読んで、東北地方が復興している様子が分かりました。仕事の関係で、昨年4月に宮城県に入りましたが、当時は同じ日本なのか？と思ってしまいました。阪神・淡路大震災も経験しましたが、東北の復興に何か力になることができたらと思っています。地震の被害を忘れないこと！これを後世に残すことも一つの仕事と思います。
（相生市・今井玄さん）

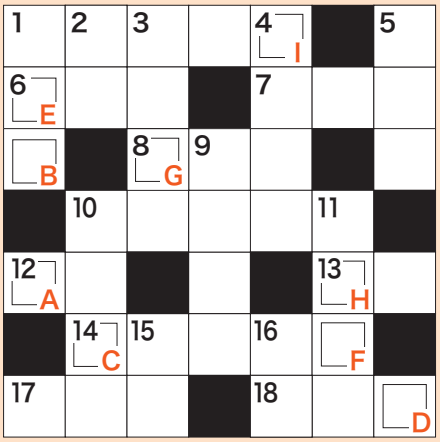
●震災のこと、被災者のことを思うと涙が止まりませんが、ここにいて自分のできることをしっかりやろう、大切にしようと思っています。
（西脇市・荻野智恵美さん）

●昨年は「絆」という言葉の重みを痛感した一年でした。今年もすべての人が手に手を取り合い、協力していきたいものです。1月号の「きずな」を読んで、あらためて思いを新たにしました。
（養父市・秋山卓寛さん）

「きずな」のバックナンバーは、当協会または各市町の人権啓発担当部署にお尋ねください。



クロスワードを解いて、A～Iの文字を順番に並べると、何という言葉になるでしょう？



タテのカギ

1 その人が生まれ育った国
2 名と合わせて個人の呼称となるもの。姓
3 隣近所。○○○○諸国との結び付きを深めたい
4 引き取って世話をすること。留学生の○○○○
5 ある物事を一緒になってする者。○○○入り
9 つながりを持つこと
10 連帯感はまず「こんにちは!」の○○○○から
11 制限、制約をなくすこと。「貿易の○○○○」
15 会った途端に○○投合
16 落語などを興行する娯楽場

ヨコのカギ

1 故郷を懐かしく思うこと
6 一○○○として親しく付き合いたい
7 ○○○をしてもすぐ仲直り
8 相手を○○○しようと努力すればその気持ちは伝わります
10 米国アラスカ州最大の都市
12 ○○の相手が外国人で国際結婚へというケースも もはや珍しいことではありません
13 いつまでも持ち続けたいもの
14 いちばん良いこと
17 生き生きとした○○○あふれる生活
18 地球上のすべての国家、すべての地域

〈1月号の答え〉**フッコウノトシニ（復興の年に）**

お便り掲載者　クロスワード正解者（抽選）　特製トートバッグをプレゼント！

「読者からのお便り」の投稿掲載者（6月号に掲載）とクロスワードの正解者（抽選で15人）に特製トートバッグをプレゼント。本誌「きずな」のご意見やご感想、人々とのふれあいを通した心温まるエピソードなどを募集しています。どしどしご投稿、ご応募ください。※投稿はペンネームの使用も可能です ※当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます

■応募方法・締め切り
はがきかファクス、メールで受け付け。クロスワードの答え、郵便番号・住所、氏名（ペンネームを使用する場合も要併記）、電話番号、年齢、職業、本誌へのご意見・ご感想を書いてください。4月6日（金）締め切り（必着）

■応募先
〒650-0003　神戸市中央区山本通4-22-15 県立のじぎく会館内
（公財）兵庫県人権啓発協会「きずな編集室」
TEL 078（242）5355　FAX 078（242）5360　✉info@hyogo-jinken.or.jp

※投稿者と応募者の個人情報は適切に管理し、誌面づくり以外の目的には利用しません

情報ぷらざ

相談窓口と生活情報番組で外国人県民の暮らしをサポート

（公財）兵庫県国際交流協会では、神戸市中央区に「外国人県民インフォメーションセンター」を開設し、外国人県民から寄せられる日常生活で困ったことや知りたいことについて答えています。また、FM CO-CO-LOで4言語による県政・生活情報番組「HYOGO Prefecture Information」を提供しています。

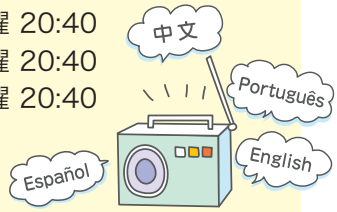
外国人県民インフォメーションセンター

言語／日本語、英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語
日時／＜生活相談＞ 月曜～金曜 9:00～17:00
＜法律相談＞ 月曜 13:00～15:00（要予約）
場所／神戸市中央区東川崎町1-1-3
神戸クリスタルタワー6階
兵庫県民総合相談センター内
※JR「神戸」駅から徒歩約3分

HYOGO Prefecture Information

（FM CO-CO-LO 76.5MHz）

日時／＜中国語＞ 火曜 20:40
＜英　語＞ 水曜 20:40
＜スペイン語＞ 木曜 20:40
＜ポルトガル語＞金曜 20:40



問い合わせ　（公財）兵庫県国際交流協会 外国人県民インフォメーションセンター
TEL 078（382）2052　FAX 078（382）2012
http://www.hyogo-ip.or.jp/infomation_center/

イベントガイド

もとまちハートミュージアム2012 ～人つなぐ道～	●**期間**／3月16日（金）～20日（火・祝） ●**会場**／神戸元町商店街（①神戸凧月堂前 ②凧月堂ホール ③こうべまちづくり会館） ※①②JR・阪神「元町」駅から徒歩約5分 ③地下鉄「みなと元町」駅から徒歩約1分、神戸高速「花隈」駅から徒歩約3分、同「西元町」駅から徒歩約5分、JR・阪神「元町」駅から徒歩約8分 ●**内容**／障がい者アート作品展「ドギドギ展」〈会場③〉、東日本大震災被災作業所製品の販売〈会場①〉、人形劇「トントンたたくはだれですか」と人形作り（劇団クラルテ）〈会場②〉、コンサート「もとまちウキウキ」〈会場②〉など ※各催しの開催日時は実行委員会事務局に問い合わせ ●**問い合わせ**／もとまちハートミュージアム2012実行委員会事務局 TEL 078（252）8280
KEN-Vi 名画サロン「もういいかい ～ハンセン病と三つの法律～」完成披露特別上映会	●**日時**／3月24日（土）10:30～・14:00～、25（日）14:00～ ●**場所**／県立美術館ミュージアムホール ※阪神「岩屋」駅から徒歩約8分、JR「灘」駅から徒歩約10分 ●**作品内容**／ハンセン病患者が隔離された療養所でどのような生活を送っていたのかを検証し、3つの法律を基に展開された絶対隔離政策など、100年にわたるハンセン病の歴史をたどる ●**料金**／1,000円 ●**問い合わせ**／兵庫県映画センター　TEL 078（331）6100

ハーフタイム

もうすぐ東日本大震災から1年が経ちます。兵庫県内では、篠山市で「忘れない3.11 参加することがボランティア。」という催しが開かれます。震災で亡くなられた多くの尊い命に哀悼の気持ちを表すとともに、震災の教訓を忘れることなく、いつまでも後世に伝えていくことが大切です。（田中）

（公財）兵庫県人権啓発協会　〒650-0003　神戸市中央区山本通4-22-15　県立のじぎく会館内
TEL 078（242）5355　FAX 078（242）5360　info@hyogo-jinken.or.jp

兵庫県人権啓発協会　検索　2012（平成24）年3月発行